

研究テーマ	都市の「路地」再発見 — 石畳から見る各都市の特色—	
目的地	国名	地域・都市名
	イタリア	ミラノ、ヴィジェーヴァノ、ベルガモ、フィレンツェ、シエナ、ペルージャ、アッシジ、スポレート、トレーヴィ、ローマ

研究旅行の目的

日本の都市から昔ながらの路地が消えている。都市空間の研究者、材野博司によれば「都市の近代化は、街路の直通化、直線化であり、建築の近代化を通しての歴史からの断絶」だという。そして、その結果「オープンで明るい空間、清潔で見通しのきく空間」は得られたが、「余韻のある変化性のある空間、歴史が物語る時間性のある空間」は失われてしまった。そして、昔ながらの路地も、建物が隙間なくひしめきあう「建て詰まり」によって消失してしまうという（材野博司『都市の街割』鹿島出版社）。経済発展や経済効率を優先する近代化が都市の空間を大きく変えてしまった今日、消えてしまう運命にある路地は、人が車社会以前の「人の目線」で生きた時代の価値やライフスタイルを象徴している。それは、都市がそこに住んでいた庶民のものであった時代を物語る空間でもある。だから、都市の「路地」を再発見することは、都市の「歴史」を再発見することになる。

この研究旅行では、古い歴史的街並みが数多く残るイタリアで、このような「路地」の意味の再発見を行うことを目的とする。イタリアの中世都市やルネッサンス都市の路地はどのような種類や特徴があり、その地域の人々にどのような使われ方をしたのか。そしてその路地が、都市空間全体にとってどんな意味をもっていたのかを考察したい。今回、特に調査の際に、路地と広場の関係、路地と石畳の関係に注目する。石畳は、石の種類や形状、組み方のスタイルなど地域的特色を色濃く表すものであり、路地空間に独特の表情を与える。私は、すでに、具体的調査のための基準になるように、独自に、各地方の石畳の特徴を大きく3タイプに分類してみた：**1. 線路のように規則性のある石畳**（デザインが綿密で華麗。遠近法を利用したものもあり主にウンブリア州に多く見られる）。**2. 路地や広場がひとつの作品のように舗装された石畳**（様々な石の種類・大きさ・形を利用しておりロンバルディア州に多く見られる）。**3. サンピエトリノを利用した石畳**（サンピエトリノと呼ばれる石を利用しており各都市に多くみられる）。現在、コンクリートで固められた日本の街に生きる私が、500年以上も前に造られた石畳の上を歩き、その感触や靴音、石畳の模様や陽の光を肌で感じながら調査を行うことで、日本の都市が失いつつあるものをそこに再発見したい。

期待される成果

上述のような、独自の分類方法で数多くの路地の調査を行いながら、イタリア各地の地方都市にみられる特徴的な路地と石畳、路地と広場、路地と地域住民など、イタリアの歴史都市の「路地文化」について新たな理解を得ることができる。また、そのような、車社会以前、近代化以前の都市の空間の意味を知ること、今の日本の都市や社会から失われようとしているものについて考える機会を得ることができる。そして、卒業論文に向けたフィールドワーク、資料収集を行うことができる。

◆研究旅行

出発予定日	2012年 2月 3日	旅行予定日数 (発着日含む)
帰着予定日	2012年 2月 17日	15 日間
	調査都市	行動・調査内容
第1日目	雪のため飛行機が飛ばずアムステルダム空港に泊まる	
第2日目	夕方、ミラノ着	
第3日目	ヴィジューヴァノ	中央駅周辺、ドゥオーモ周辺、ドゥカーレ広場、カステッロ周辺
	ミラノ	ポルタ・ジェノヴァ駅～ミラノ中央駅
第4日目	ミラノ	トリノ通り、ドゥオーモ周辺、メルカンティ広場、ガッレリア周辺
	ベルガモ	ヴェッキア広場、ドゥオーモ周辺
第5日目	フィレンツェ	ドゥオーモ周辺、シニョリーア広場、グレチ通り
第6日目	シエナ	バンキ・ディ・ソプラ通り、カンポ広場、ドゥオーモ周辺、 チッタ通り、サン・ドメニコ教会周辺
第7日目	ペルージア	イタリア広場、11月4日広場、ドゥオーモ周辺、アッピア通り
	アッシジ	ドゥオーモ周辺、サンタ・キアラ聖堂周辺、コムーネ広場、 サン・フランチェスコ通り、サン・フランチェスコ教会周辺
第8日目	スポレート	チェントロ内、ドゥオーモ周辺、マッテオ・ガッタポニ通り、 メルカート広場
	ペルージア	イタリア広場、11月4日広場、ドゥオーモ周辺、エトルリア門
第9日目	トレヴィ	スタツィオーネ通り～マッジョーニ広場周辺
	ローマ	パンテオン周辺、トレヴィの泉周辺、スペイン広場周辺
第10日目	ローマ	ポポロ広場、コルソ通り、スペイン広場
第11日目	ローマ	カヴール通り、フォロ・ロマーノ周辺、テヴェレ川周辺、 カンポ・デ・フィオーリ、サンタンジェロ橋周辺、ナヴォーナ広場、 パンテオン、キージ宮周辺、トレヴィの泉周辺、レプブリカ駅周辺
第12日目	ローマ	ヴァティカン市国、サン・ピエトロ広場、 サン・シルヴェストロ広場、
第13日目	ローマ	ポポロ広場、コルソ通り、バブイーノ通り、11月4日通り、 パニスペルーナ通り、アッピア旧街道、セッテ・キエーゼ通り
第14日目	ローマ→アムステルダム	
第15日目	→インチョン→福岡	

路地文化

— 石畳から見る各都市の特色 —

研究成果

1.線路のように規則性のある石畳

(ウンブリア州：ペルージア、アッシジ、スポレート、トラーヴィイ)

① ペルージア

比較的高い建物の間に造られた狭い路地へは十分に光が行き届かず、薄暗い路地が多い。道路と路地網が立体化され、紀元前から引き継がれてきた都市計画、設計手法の原点を見出す。



アルコ・エトレスコ（紀元前 2～3 世紀）



アックアドット通り



ほとんどのアーチは紀元前 9～10 世紀に造られた

② アッシジ

柔らかな印象を持つ外壁の間に造られた路地を歩くと、守られているという安心感が与えられる。また、鉢植えの植物がより華やかさを醸し出し、明るい方へと導く路地が多い。



階段路地



光を取り入れた明るい路地

③ スポレート

まさに線路のような路地には様々な形、色、大きさの違う石が使われている。また、ドゥオーモ広場への道のりにはピエンツァの透視図法理論、遠近法からできた広場の路地版といえる。



緩やかな坂の広場



カーブ、直線路地

④ トレーヴィ

中世の面影を残したイタリア路地の造形デザインがある。デザインは綿密で華麗に仕上げられている。「人の視線」で造られた路地だということがよくわかる。



色や形、質の違う石が路地に彩りを与える

2. 路地や広場がひとつの作品のように舗装された石畳

(ロンバルディア州：ヴィジェーヴァノ、ミラノ、ベルガモ)

⑤ ヴィジェーヴァノ

ドゥカーレ広場は、ドナート・ブラマンテとレオナルド・ダ・ヴィンチが設計に参画したといわれ、ルネサンスの趣を残す広場である。丸みのある石を使用し、人々

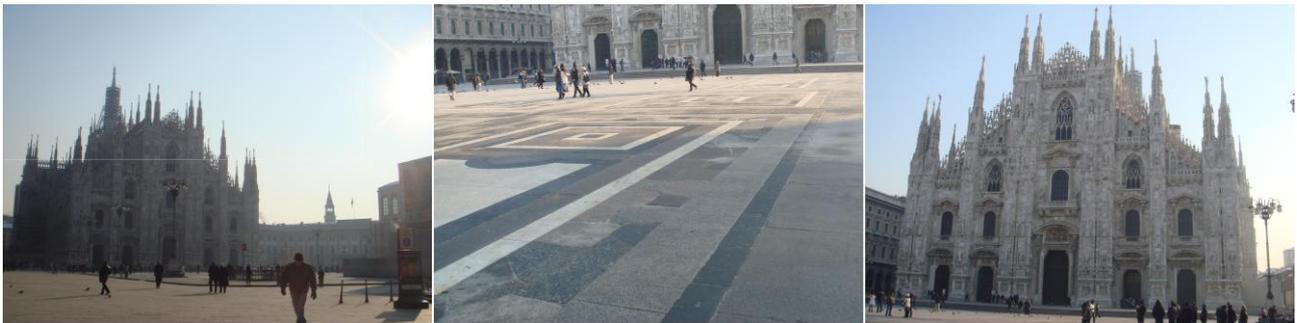
をこの広場に誘い出すようなカーブを用いたデザインである。



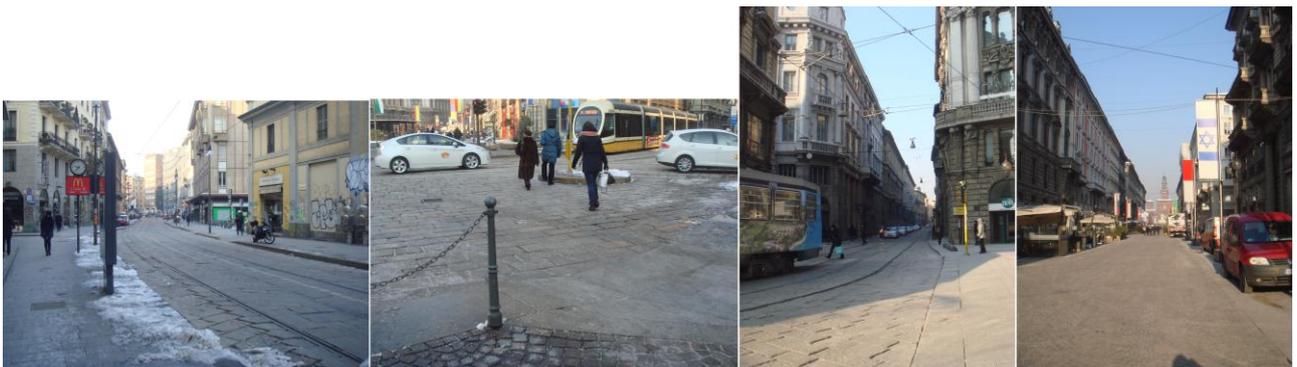
ドゥカーレ広場

⑥ ミラノ

この広場はドゥオーモをより威厳あるものに強調する役割を果たしている。広場と建築が一体となった芸術作品といえる。また、街は人、車、バス、トラム（市電）のために造られた広く大きな道が通っている。



ドゥオーモ広場



人・乗り物のための道

⑦ ベルガモ

ヴェッキア広場は、15世紀に作られ始めた。赤ワイン色をしたレンガを使った広場は人々に落ち着きを与えている。また、路地の両脇には多くの店が立ち並び、常に人々が行きかっている。



ヴェッキア広場



温かさある路地

3. サンピエトリーノを利用した石畳

(ラツィオ州：ローマ)

⑧ ローマ

街中の路地はサンピエトリーノと呼ばれる石を手作業で道に埋めていくことで造られる。そのサンピエトリーノを利用し、街には数種類のデザインがある。

また、紀元前4世紀に建設が始まったアッピア街道は、「すべての道はローマに通ずる」という言葉のように、約15万km張り巡らされていた。軍事用に造られた道は現在でもオリジナルが残り、通ることができる。





様々なサンピエトリーノを利用したデザイン



アッピア街道

4.その他都市

(トスカーナ州：フィレンツェ、シエナ)

⑨ フィレンツェ

路地も広場も地元の人や観光客をはじめ、多くの人々が行きかかっていて賑やかである。目的地まで真っ直ぐに伸びる道には大きくて表面が滑らかな石が使われている。



⑩ シエナ

世界一美しいといわれるカンポ広場を中心に、シエナの路地は緩やかなカーブを描いている。進めば進むほど、次はどこに着くのかわからない人を誘い込むような路地が張り巡らされている。



カンポ広場



奥行ある路地

5. 石畳の工事現場

水道工事や痛み、模様替えなどの理由により、石畳（サンピエトリーノ）の張り替え工事が行われることがある。石は一旦取り除かれるが、その後、新たに砂や小石、セメントで土台を作り、10～15センチのサンピエトリーノが敷きなおされる。たまたま私の滞在中にフィレンツェとローマで工事が行われていた。



路地裏での水道工事（フィレンツェ）



路地・広場の大規模な模様替え（ローマ）

まとめ・感想

今回、私はイタリア北部～中部の10都市で、それぞれの都市の特徴を路地から読み説くため、現地調査を行った。以下、大きく2つにまとめた。

1つは、地方（州）の分類だけでなく、街の大きさによって路地や石畳の特徴に共通点を見つけた。それに大きく関係してくるのは「人の目線」だと考察できる。

大都市には多くの人々が集まり、その人々を円滑に移動させる手段として乗り物が登場してくる。それは都市の近代化を意味し、「人の目線」より「乗り物のレール」が優先されるということだ。一方、小都市では人と人との繋がりやコミュニティを大切に守ってきた。「人の目線」が重要視される。それを最も象徴しているのはやはり路地であって、たとえ、周りに教会が建っても、オリーブ畑ができて、路地だけは変わることなく、近代化以前の時間の流れや人々の動き、雰囲気がこびりついている。

もう1つは、路地にはたくさんの用途があった。例えば、路地が店の延長になっていたり、

洗濯物を橋渡しにしたり、花で飾ったり。人々にとって重要な生活の場、コミュニケーションの起点となっていた。また、都市の空間の一部として、人々を目的地まで誘導するために石畳の張り方に工夫があったり、曲がりくねっていることで、もっと先に進みたい気持ちにさせられた。

以上のことから、イタリアは古代と現代に生きる国と言われるのかもしれない。1つの路地にとっても、あのように美しくする必要は決していない。それでも魅力的な石畳を敷くのは、たくさんの人々を街へと送り出す時に、何とも言えないワクワク感を味わってほしいという願いがあるのではないかと、思わずにはいられない。

しかし一方で、イタリアの象徴ともいえる石畳が消えかけているのも事実である。工事をする度に掘りだしたり、女性はヒールが挟まったり、雨の日に滑りやすかったりと問題を抱えている。数年前に石畳をすべてアスファルトに変えてしまう計画もあったが、市民の反対で保存されることとなった。図のように半分アスファルトで埋められた道は今後増えて欲しくない。



感謝

最後になりますが、研究旅行奨励制度を利用し、自分の足でたくさんの都市を巡り、日本では決して手に入れることは出来ない貴重な資料を得ることができました。このような機会を与えてくださった国際文化学部の方、関係者の方々、特にゼミ担当の山田先生、心から感謝しています。ありがとうございました。

参考文献

- ・ Ludovica Cibin 『SELCIATO ROMANO Il sampietrino』 Gangemi Editore
- ・ 材野博史 『都市の街割』 鹿島出版会 1989-4-24
- ・ 竹内裕二 『イタリアの路地と広場 上 シチリアからプーリアまで』 彰国社 2001-8
- ・ 竹内裕二 『イタリアの路地と広場 下 ロンバルディアからサルデーニャまで』 彰国社 2001-08
- ・ 竹内裕二 『イタリア中世の山岳都市：造形デザインの宝庫』 彰国社 1991-09